

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「はだかの王様」(教育出版・四年下)による人間相互の感情摂取 : 主として嘘の心情をめぐって
Author(s)	松原, 俊一; 上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究 , 3 : 31 - 35
Issue Date	1969-11-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045041
Right	
Relation	



「子どもの発言」 レポート (2)

「はだかの王様」(教出・四年下)による

人間相互の感情摂取

松原俊一
上原輝男

主として嘘の心情をめぐって―

・教材―はだかの王様(教育出版・四年下)

・対象児童―四年一組・男十八、女二十二

(葛飾区立高砂小学校)

・実施日―昭和44年3月6日

資料I 大臣や役人が嘘を王様に言ったことについて

言ったことについて

ぼくは大臣・役人はその織っている悪がしこい男に「みごとなでばえでございましょう」と急に言われてしかたなく「たいへんみごとでございませう」と言っ

たと思う(M・M)

私が見えぬ大臣が見えないと言えはバカと言われ、また大臣からおろされてしまうかも知れない。もしかすると、バカなのをかくしていたというのでころされてしまうかも知れません。お役人もそうです。そうしたら家の人もこまってしまうからだと思います。

(J・A)

大臣などが見えないと言ったら、ちょっとバカみたいというコトバの意味が入るけれど、大臣のくらいな

ど、おとされてしまうと思つてウソを言った。(K・O)

大臣が大臣のしかくがないのかと思つてウソを言ったら、役人も自分ひとりだけ見えないんではないかと考え、見えないのに見えるといい、どんどん見えると言つてうそをついた。(M・N)

見えないと言つたら大臣も役人も、首だあと言われるから……(T・Y)

織っている着物を見えませんが、言つて自分の仕事がなくならない、仕事がなくなら生活にこまったりしたらこまるので、うそをついて見えると言つた。

(M・Y)

着物が見えなかったら、大ばかで役たらずで、王様に首にさせられたら、ろとうにくれるのがこわくて、大臣、役人は見えないものを見えると言つた(S・M)

なぜ見えると言つたかと言うと、自分が大ばかとか役にむいていないと言うのを知られたくなかつたんだけれど、それは自分で自分を大ばかとか役に向いてないと思つたくなかつたし、自分でも思つたくなかつた。ほかの人が見えたら自分が見えないという恥をかくので見えると言つたとおもう。(Y・I)

それは私の考えではきつとこわくなつたからありもしないものがあるとうそを考えたのだと思つた。その国のくいにやに思われるのがいやでうそを思つたり言つたりした。(Y・U)

大臣たちははたおりがまさかそのようないんちきをしているとは知らなかつたし、それを本気にして目がおかしいのかなあと思つた。大臣はしょうじきだけれど、それが本当だったら、大バカ者になってしまうので、まさかそんなことはないと思つた。(Y・M)

私は、そのふたりは大ばかものだと思つた。だつてありもしないのふたりの織っている織物をほめたりするから。そりゃあ、ほめないと大ばかものとか役にむかないと言われるけれど、本当のことを言わない人こそ、もつと大ばかものと思つた。(T・O)

資料II

王様が自分で見に行つて嘘を言ったことについて

大様は自分たちのため(バカだとか役にむかないと思われたらへん)にうそをついたりしたのだからその織物が見えなくてあたりまえ。(J・A)

王様は大臣に見えてこれはいけないと思つてよろし

うそをついちゃえ、と思って見えると言った。

(M・T)

王様が見えないと言ったら王様のしかくがなくなる
と言われて、王様ができなくなってしまうから。

(T・Y)

王様が見えないと言ったら自分は王様のしかくがな
くなってしまし、また大臣や役人がその役にむいて
いないことになり、自分だけが見えないなんておかし
いと思っそう言った。(Y・D)

王様は国をおさめる人がいなくなったらたいへんだと
思っだから。(C・S)

この王様はばかな王様だと思っ。それは見えもしな
い洋服を、みごとじゃみごとじゃと言ったつて、自分
が見えない洋服を着てもつまらない。(T・Y)

王様はだまされたのがわからなかつたからばかだと
思っ。(K・T)

資料Ⅲ おともの家来などが

王様をほめたことにつて

王様がはだかだなんて言ったら王様に恥をかせる
ようなものであると思っ、えらい王様にそんなことを
言ったら、失礼になるとだめだから、わざわざおせじ
のようなことを言った。(Y・M)

自分たちより王様はえらいので、王様は何も着てい
ないのを知っはいたんですが、えぼっちゃいけな
いと思っそう言った。(M・K)

王様のきげんをとるためだと思っ。(M・N)

王様はえらいからはだかだというとぶよくしたこ
とになり、服が見えないとばかになるから、うそを言
ってはめた。(T・O)

見えないといっ、ろうやに入れられたりしたらた

いへんだと思っ、とてもすばらしい布ですとうそを
言ったと思っ。(T・O)

自分たちがバカものとか、役にむかないといわれた
くなかつたからです。(N・H)

もし、そうしないとバカだと人々に見つかるから、
そんなふりをした。(C・S)

資料Ⅳ 町の人々が王様の行列を

ほめそやしたことにつて

王様ははだかだと言っとその行列がだめになるから
です。(M・Y)

王様のはだかを言っ、せっかくの行列がだめにな
るから大人の人はえんりよして言わなかつた。(M・T)

子どもと大人の頭はちがうから、大人は子どもとち
がって先のことを考えるから、大人はさからつたらわ
るいなあと思った。(T・Y)

大人の人は見っそのまま言う力は持っていないから。
(K・T)

大人の人も王様ははだかだと思ったとおもう。だけ
ど大人は自分の見まちがいだと思ったから、それに王
様にさからつては、いけないと思ったから。(K・O)

大人は思っていることを言えない。(Y・D)

王様はこの国で一番えらいから、さからえなかつた。
(M・N)

町の大人たちは、王様のきげんをとろうとして「い
いですね」と言っただと思っ。(K・H)

町の人が言っただは見えないのが、みんなに気づか
れなかつたから。(R・I)

大人はうわさをよく知っていて見えないので、ばか
に思われちゃたいへんだつたから。(Y・M)

大人はそんな目に見えない着物があると思ったから

自分には見えなくても、王様たちには見えるだろうと
考えた。(N・H)

資料Ⅴ 子どもが「なあんだ。

何も着ていないや」と言ったことにつて

その子どもはしょうがない子だと思っます。どうし
てかと言っると子どもは王様のきげんをとることなど考
えないでいたから、そう言っただです。(K・H)

子どもにはまたきげんをとるということはわかんな
いし、見えないとバカということもわかんないからそ
う言ったんじゃないかと思っ。(K・O)

きつとその子は小さい子でなんにもわかんないとい
うように小さいので見たことをはっきり言っただと思
いっます。また小さい子でなくても、そういうことを
よく知らなくて、王様のごきげんをとることなんかし
なかつたのだと思っます。(J・A)

子どもは王様や大臣たちと話しをあわせようとい
う考えがなく子どもは王様は何もきていないという考
えで、大人のようにこわがるようなそんな考えはなかつ
た。(A・A)

大人ははだかだと言ったら王様にはじをかせるこ
とになり、失礼なことになり、だめかと思っ、わざ
わざ、おせじのようなことを言っただ人もいっらう。け
れども、子どもはそんなことを別に気にしなかつたの
で、本当のことを言っただらう。(Y・M)

子どもには役目はないし、役目をやめさせられるよ
うなことないから。(M・Y)

子どもが持つていっる子どもだけのことで。そうい
う心は大人にはないからです。かんたんなことは、大
人の人は言えるけれど、大人の人は見っそのまを言
う力は持つていないけれど、子どもにはある。大人に

は言えないことと言ることがある。(K・T)

子どもと大人の頭はちがうから、子どもは大人とちがってあまり先のことを考えないけれど、大人はさきのことと考えて、へんなことを言ったらわるいなあと思うから。(T・Y)

この子は、王様のはだかのかっこうが、どうしても洋服を着ているように見えないのでようし思いきって言っちゃえと思っておもしろがって言ったのです。(M・T)

その子のはだかだと言うとぶじょくしていることも服が見えないとバカだということも知らなかったから子どもは自分の見たとおりに言ったのだと思います。(T・O)

この子は見たとおりに「あれぼくにはなんにも見えないや」と思って見たとおりに言った。(K・O)

この子のしゃべったことはべつだんいいとは思われない。それであたりまえなのだから、それはそれでいいとする。この子はべつに自分がばか者でも、役に向かなくても、そんなことを考えないで発言したと思う。だからこの子の言っていることはふつうのことであると思う。(K・H)

ぼくはその子は悪い子だと思う。なぜかと言うと、「なんだ、なんにも着ていないじゃないか」と言ったのは、王様の行列をじやましたのと同じだから。(M・N)

子どもは心に思ったことを言った。それで子どもは正直だと思った。(Y・D)

子どもはえらい。大人なんかはうそを言ってほめたけれど、正直に「なんにも着ていないや」と言ったから。(Y・M)

子どもがそう言ったのは子どもは正直であれれば

うだから、おこられてもいいと思つて着物を着ていないと言つたと思う。(T・O)

資料VI 王様が最後まで行列を続けたことについて

ぼくは王様はえらいと思う。それはふつう逃げ出すことをこらえたから。王様だったから出来たんだと思う。ふつう王様は町のためにいるから、行列をつづけたんだと思います。(M・M)

ふたりの男にだまされても、やはり行列をやめるわけにはいかない何かがあったんだと思う。(Y・M) 自分かかってにやめるなんていくじのない王様だと思われてはこまるし、国の人々のうわさになつてもこまるから、自分がえらいと思われたら嬉しいからつづけたと思う。(Y・M)

王様は自分も知つていても、そのまま行列をやめても、あとで「おつちよこちよの王様」と言われて、へんなうわさがひろがるのでせめて自分だけでも知らんかおをしていれば行列をやめないよりは、へんなうわさは立たないと思つてそのままつづけた。(M・T) 王様はここまで行列をやつてきていまさらやめることができて、王様はやぶれかぶれとか、この国で一番えらい人なのをやめるなんて恥をかくと思つていつたとおもう。(Y・D)

もうここまでできて大きすぎたから、しかたがないような気持で行列をしたと思う。(A・A) もう行列はやめたと言つたら、町ははつてんしなし、ほかの王様にしろと言われて王様をやめさせられるから行列をつづけた。(T・Y)

王様のあとにはたきさんのけらいがいるので、そんなに急には向きをかえられなかったから。(Y・M)

ふたりのはたおり師について

ぼくはふたりのおりの師のことを、どきよのある男たちだと思う。なぜなら国でいちばんえらい王様をだましたから。(M・N)

ぼくはりこうでずるがしい男たちだと思つた。(T・Y)

私が思うのには、そのおりの師たちは頭がいいと思ひます。それは王様が着物好きなので、その人たちは何も作らなくて、ざいりようをかうと言つてウリをつき、そのお金をもらい、そのお金を自分のものにしたからです。(Y・M)

ぼくはそのふたりはトンチのようなものがうまいと思う。それは王様が見えなかつたらバカだと思つたら、自分のことにもなると考えたと思つた。そして計画をたてたら、ちょうど着物の好きな王様のところへ来たのだと思つた。(K・O)

なかなかおもしろい考えだと思つた。それは王様をだましてお金をもらいくんしょうまでもらうとは本心に考えがいい。わるい人でなく、いい人なりたいと思つた。(K・O)

私はそのおりの師のことをとてもわるいとは思つたけれど、そおいうのはたおりのまねをするなら本心にできると思う。だけどそんなことはやらないほうがいい。(A・A)

このおりの師は、そうとうこすいやつだと思つた。働きかたや、働きかたをうまくして皆に着物を作つていふんだと思わせるために着物をおるようふりをするとところがにくらしい。この男たちは計画的の悪がしい頭を持つていふと僕は思うのである。だまされるほうがむしろわるい。(K・H)

ふたりのうそつきはバカであらうでドロボウだと思

う。(Y・M)

そのおりの師たちはお金のことをだけを考えている人だと思えます。一本も使っていない糸で糸がたりないから、お金を王様からもらうこのふたりはわるい人だと思えます。(H・K)

王様にめいわくをかけるわるい人です。(Y・S)
〔註〕内容の似通ったものは省略した。

以上の資料の整理に入るに当り、K社版教師用指導書の次の表記と比較するところから始めよう。

『この〃はだかの王様〃は、ただこっけいなものとしてすまされないものがある。人は何かものにこだわると、正しくものを見ることができなくなってしまうと言う、この物語の示唆しているものは意味深い。王様を〃はだか〃と言いつつ切ったのは、純真な子どもであった。あるがままにものを見たのである。』

先の子どもの資料に目を通されるなら、筆者ならずとも、子どもの直接印象や理解と、指導者の指導目的や指導姿勢とは、蔽うべくもない断層があることが知られよう。

実は指導書と同じ見方をしている者はわずかに四名を数えるのみである。そして、それ以外の子どもたちは、そうした考え方ができなかったわけではなくて、殆んどが、その段階を超えたところで印象し、思考を働かせているのである。資料Vの殆んど例がそれを証明する。即ち

「……きげんをとることなど考えていなかったから……」(K・H)

「……きげんをとるということはわかんないし、見えないとバカということもわかんないから……」(K・O)

「なんにもわかんないというように小さいので……」

(J・A)

「……話をあわせようという考えがなくて……」

(A・A)

「……(はじをかかせる) (失礼なこと) そんなこと別に気にしなかったので……」(Y・M)

「子どもは大人とちがつてあまり先のことを考えないけれど……」(T・Y)

等である。これらの回答の中には、明瞭に大人の複雑さを認めようとする子どもの方向がある。もし、指導書のように事実を事実とする見方を求めるならば、

(K・H)の発言などが正しい筈である。即ち

「……べつだんいいとは思わない。それであたりまえなのだから、それはそれでいいとする。……この子の言っていることは、ふつうのことであると思う」

この回答は(T・O)の発言と併せ考えると単に論理のふりまわしでなく、テキストの厳密な読みの上に成り立っているかもしれない。即ち(T・O)は

「……はだかだと言うと、ぶじよくしていることも服が見えないとバカだということも知らなかったから……」

というのであるが、もしその子が、話のポイントである〃正直者だけに見える服〃という噂を耳にしていないう、全くの第三者だとすると(教科書本文ではこの点よくわからず、むしろ第三者的扱いと見る方が妥当なようである)ほめられたり、良い悪いの判断に属することではない。読者の勝手が自己暗示が(この場合、子どもと大人の対比という)〃純真〃という錯覚を生んだのであって、正しい論理展開とは言えない。(K・T)の例のように、大人と子どもの強引な対比として把えた子どもにおいてのみ、うそと正直とを対比さ

せて「子どもはえらい……」(Y・M)と発言していることは、それほど賞揚すべき考え方であろうか。

〃見たとおり〃というのは、子どもにとって〃正直〃でも〃べつだんいいこと〃でもない区別していることの方を注意しなければなるまい(K・O)。

子どもたちは、もつと大人を理解しようとすることの方が強い。というよりそれが子どもたちの学習であることの方が自然である。彼等たちのこの資料は、うそを拒絶していない。うそは〃しかなかった〃つかれる(M・M)。その多くは、生活権を脅やかされる不安からという回答と、他人(世の中)からよく見られようとする人情肯定の立場をとる回答とで殆んど占められる。前者は子どもの現実的思考と、後者は子どもの心情本意と伺えるが前者が「もし〃たら〃する」という仮定の推定による不安であるのを見れば両者い

ずれも心情本位の思考というべきであろう。特記すべきことは、いわば流される心情ではなしに〃うそ〃が〃抵抗〃の心情として把握されかかっていることである。〃恥をかいたので〃〃思われるのがいやで〃〃知られたくなかったし、自分でも思いたくなかった〃

(Y・U)と微妙な内面に立ち入って来ている。ところが、先の道徳的判断において把えた四名の内(T・O)(Y・M)にあつては、「本当のことを言わない人こそもつと大ばかものと思う」とか「ふたりのうそつきはバカであらうでドロポウだと思う」とか述べる

が、この遮断的発想は人間感情の陰影理解の方向とは交わらない。この(Y・M)が、王様が最後まで行列をつづけたことについての回答に、「王様のあとにはたくさんさんのけらいがいるので、そんなに急には向きをかえられなかったから」と極めて特殊な理由をつけているのも、発想の根本的差異として把えられることで

あろう。即ち、「ふたりの男にだまされても、やはり行列をやめるわけにはいかない何かがあったんだと思う」(T・M)というこの「何か」を思わなければ少くともこの物語は成立しないであろう。そして不思議なことには、王様に対する軽蔑・非難の声は機織師に対する軽蔑・攻撃はあっても直接的なものとしては一例もない。物語の面白さに引きつられた結果とも言えるかもしれない。いわゆる同情を呼んだのかもしれない。「ぼくは王様はえらいと思う。それはふつう逃げ出すことをこらえたから。王様だったから出来たんだと思う」(M・M)というのもある。文字面だけでは王様はバカだという二例があるが、指導書に掲げているような意味でのバカさの指摘ではない。即ち

「この王様はばかな王様だと思ふ。それは見えもしない洋服をみごとじゃみごとじゃと言つたつて、自分が見えない洋服を着てもつまらない」(T・Y)

「王様はだまされたのがわからなかったからばかだと思ふ」(K・T)

少々ピンボケの嫌いはあるが、むしろいゆる身びいき的な発言であるかもしれないとさえ思われるのである。

他の殆どが、王様が最後まで行列をつづけたことに対して、同情的用語を連ねていることからそう思われるのである。(尤もこの設問の「最後まで」という語が誘導的役割を果たしたかなと反省もさせられるが)

(M・T)は「せめて自分だけでも……」と言ひ
(Y・D)は「いまさら……やぶれかぶれ……」と
(A・A)は「もうここまできて……しかたなく」と、不可抗力的許容の中で王様を扱えていることである。そしてそれが、人間相互の見る目、見られる目を意識した中で行われていること、即ち

「……なんていくじのない王様だと思われてもこまるし、……人々のうわさになってもこまるから……自分がえらいと思われたら……」

と、(Y・M)は言ひ、(Y・D)は「恥をかくと思つていった……」と述べている。またこんな用語ではなかったが、(M・T)は、それが口ぐせでもあろうが、資料II・V

「……ようしうそをついちゃえ」と……
「……ようし思い切つて言っちゃえ」と……
「……ようし」はこの間の状況を写しているものである。

以上の如く、本資料にあらわれた多くの子どもの視

点は「嘘と正直」でもなかったし、「子どもの純真さ」でもなかった。むしろそれを超えた人間相互感情の摂取にあったと言ふべきではないだろうか。またその方向は、本物語の裸の王様を読む正しい姿勢でもあろう。何故なら、正直者だけに見える服という嘘は、嘘をついている者だけが着られる服であったし、全くの正直者だけの世の中では成立しない話であったからである。だとするならば、嘘をつかねばならない人間の相互心情の理解から始まる。そのためにこそ、資料全部にわたって「恥をかく」「恥をかかせる」「失礼」「きげんをとる」「おせじ」「遠慮」「さからう」「気にする」等の用語がしきりと繰返されているのだと思うのである。

入会の御案内と投稿規定

本誌は、幼稚園・小学校の現場人が現場でつくる雑誌ですから、幼・小の先生方ならどなたでも正会員となれます。

現場での御報告・御研究をお寄せ下さい。四〇〇字詰二十五枚以内。ただし、子ども中心のものであるのが本誌の特徴です。採否は編集部にお任せ願います。

ほかに研究会その他を計画致します。

本誌購読者の方々(一年分まと

め)を会友になって頂きますが、原稿掲載は正会員に限ります。

入会御希望の方は

- ① 芳名
- ② 御住所
- ③ 勤務先
- ④ 担当学年
- ⑤ 本年度使用の国語教科書使用出版社名

を必ずお書き下さり、本年度会費(千円)を添えてお申し込み下さい。

(事務局)